

高齢者施設における虐待予防プログラムを用いた研修実施と効果検証

落合克能^{*1)}、松島範正²⁾、増田公基³⁾、鶴見俊輔⁴⁾、野中一臣⁵⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾特別養護老人ホーム西之島の郷、³⁾介護老人福祉施設浜松中央長上苑、⁴⁾特別養護老人ホーム浜松十字の園、⁵⁾介特別養護老人ホームみずうみ

I 研究背景・目的

高齢者施設における「養介護施設従事者等による虐待（高齢者虐待防止法）」は、近年、増加の一途を辿っており、2015年度に行政が養介護施設従事者等による虐待と認定した事件だけでも全国で402件発生している。

本研究は、筆者が関わっている「えんしゅう介護福祉サービス研究会（法人、施設の枠を超え、高齢者施設関係者が学び合う研究会）」の世話人のうち5人で考案した「高齢者施設における“虐待抑止要因構造化および不適切ケアの再認識”による虐待予防プログラム」（①虐待抑止要因構造化プログラム、②不適切ケアの再認識プログラムを各2時間）の効果検証とプログラム内容および実施方法の改善等を目的として実施した。

II 研究方法

本研究は、2018年10月～2019年2月に介護老人福祉施設3施設（静岡県西部）において「高齢者施設における“虐待抑止要因構造化および不適切ケアの再認識”による虐待予防プログラム」を用いて行った虐待予防研修後（上記のプログラム①②それぞれのプログラム終了時）に、参加者に対して実施したアンケート調査の結果を分析、考察したものである。研修施設および参加者等に関しては、表1の通りである。

なお、本研究で用いた「高齢者施設における“虐待抑止要因構造化および不適切ケアの再認識”による虐待予防プログラム」に関しては、上述した「えんしゅう介護福祉サービス研究会」の研修等で用いてきたが、明確な効果検証を行っていなかったため、表1のA施設およびB施設における研修実施後にアンケート結果や研究チームのメンバーが感じたことなどを踏まえて次回プログラム実施に向けて修正すべき点などを検討し、プログラムの実施方法（主にプログラム開始時の導入方法、構造化の方法に関する説明方法、構造化過程におけるスタッフによる助言方法等）に関する修正を行った。

本研究実施にあたり、調査協力者には、事前に①研究の目的・意義、②調査への協力は本人の自由意志であること、③収集したデータは、個人が特定されることがないよう適切に処理すること等について、口頭および研究協力依頼文書により説明を行った。本研究は聖隷クリストファー大学倫理審査による承認（承認番号：18033）を受けて実施した。

表1 プログラム実施施設、実施時期、参加者属性、参加者数

施設名	研修（調査）実施時期	研修参加介護職員の属性	研修参加者数
A施設	2018年10月下旬～11月上旬	介護職員（ユニットリーダー）	12人
B施設	2018年11月下旬～12月上旬	介護職員（混在）	15人
C施設	2019年2月中旬	介護職員（ユニットリーダー）	11人

Ⅲ 研究結果

1. プログラム全体を通した受講者の満足度および虐待予防効果に関する主観的評価

本プログラムを用いた研修に参加した介護職員の総数は 38 名であったが、業務等の都合により、プログラム②の際に最後まで参加できなくなってしまった参加者が 3 名いたため、プログラム全体を通しての【満足度】および【虐待予防効果】に関する調査の実施対象者の総数は 35 名であった。この調査項目に関する有効回答数は、35 名中 30 名 (85.7%) であった。

本プログラム①および②全体を通しての【満足度】は、「満足」が 57.0%、「まあ満足」が 40.0%、「どちらともいえない」が 3.0%、「やや不満」、「不満」と回答した参加者はいなかった (図 1)。また、プログラム①②全体を通しての【虐待予防効果に関する主観的評価】に関しては「効果がある」が 50.0%、「まあ効果がある」が 34.0%、「どちらともいえない」が 16.0%、「あまり効果がない」、「効果がない」と回答した参加者はいなかった。(図 2)

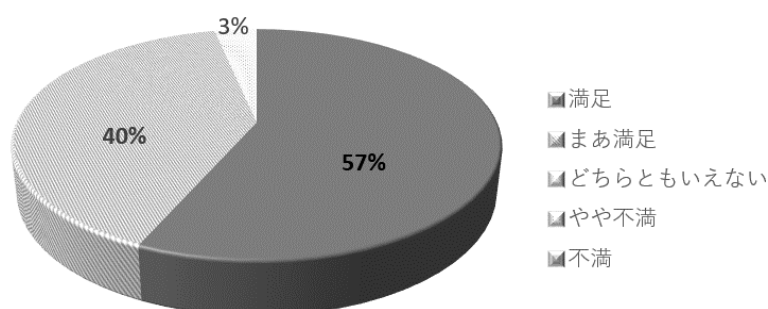


図1 プログラム①②（全体）の満足度

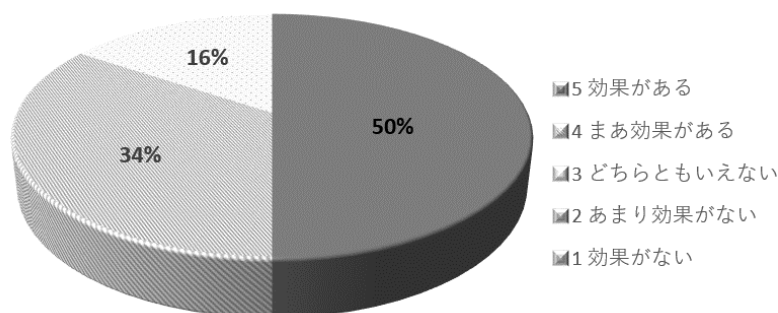


図2 プログラム①②（全体）の虐待予防効果（主観的評価）

2. プログラム①「虐待抑止要因構造化プログラム」に関する調査結果（図3）

プログラム①に関するアンケートの有効回答数は 37 (97.3%) であった。

【満足度】に関しては、「満足」が 62.2%、「まあ満足」が 35.1%、「どちらともいえない」が 2.7%となっており、下位選択肢を選択した者はおらず、【施設の虐待誘発要因および抑止要素を構造化する必要性】についても、「必要性を感じた」が 62.2%、「まあ必要性を感じた」が 35.1%、「どちらともいえない」が 2.7%であり下位選択肢選択者はいなかった。

また、【意識の変化】に関しては、「あった」が 64.9%、「まああった」が 32.4%、「どちらともいえない」が 2.7%、【虐待予防効果】に関しては、「効果がある」が 46.0%、「まあ効果がある」が 40.5%、「どちらともいえない」が 13.5%となっており、下位の選択肢を選択した者はいなかった。

【進行の適切性】に関しては、「適切」が 67.6%、「まあ適切」が 29.8%、「どちらと

もいえない」が 2.7%、【説明の分かりやすさ】に関しては、「分かりやすい」が 70.3%、「まあ分かりやすい」が 27.0%、「どちらともいえない」が 2.7%となっており、下位選択肢を選択した者はいなかった。

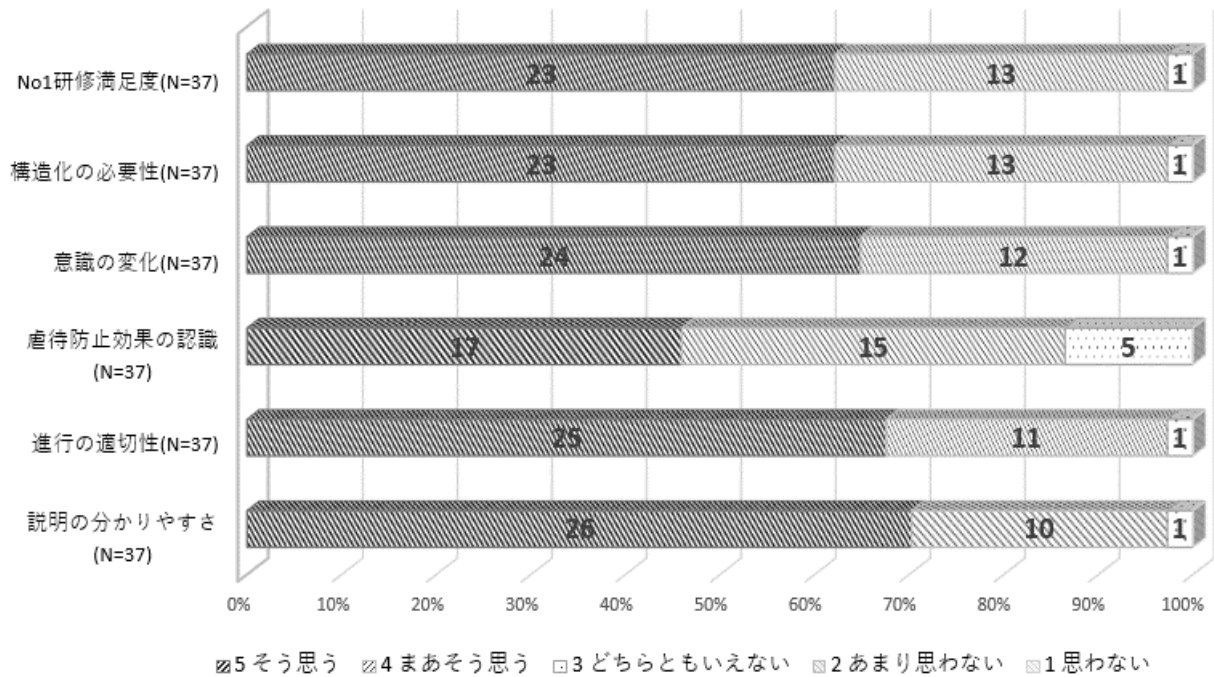


図 3 プログラム①「虐待抑止要因構造化プログラム」のアンケート結果

3. プログラム②「不適切ケアの再認識プログラム」に関する調査結果（図 4）

プログラム②に最後まで参加した受講者は、3施設合計で 35 名であり、調査に協力してくれた受講者は 32 名 (91.4%)であった。

【満足度】(有効回答数 30) に関しては、「満足」が 46.7%、「まあ満足」が 46.7%、「どちらともいえない」が 3.3%、「やや不満」が 3.3%となっていた。また、【不適切ケアの明確化】(有効回答数 31) については、「できた」が 32.25%、「まあできた」が 61.3%、「あまりできなかった」が 6.45%、【施設における不適切ケアの構造に関する理解】(有効回答数 31) に関しては、「理解できた」が 48.4%、「まあ理解できた」が 41.9%、「どちらともいえない」が 9.7%となっていた。

また、【意識の変化】に関しては、「あった」が 62.5%、「まああった」が 25.0%、「どちらともいえない」が 12.5%、【虐待予防効果】に関しては、「効果がある」が 40.63%、「まあ効果がある」が 40.63%、「どちらともいえない」が 15.62%、「あまり効果がない」が 3.12%となっていた。

【進行の適切性】に関しては、「適切」が 80.0%、「まあ適切」が 20.0%、「どちらともいえない」及び下位選択肢は選択されていなかった。【説明の分かりやすさ】に関しては、「分かりやすい」が 65.6%、「まあ分かりやすい」が 28.1%、「どちらともいえない」が 6.3%となっており、下位選択肢を選択した者はいなかった。

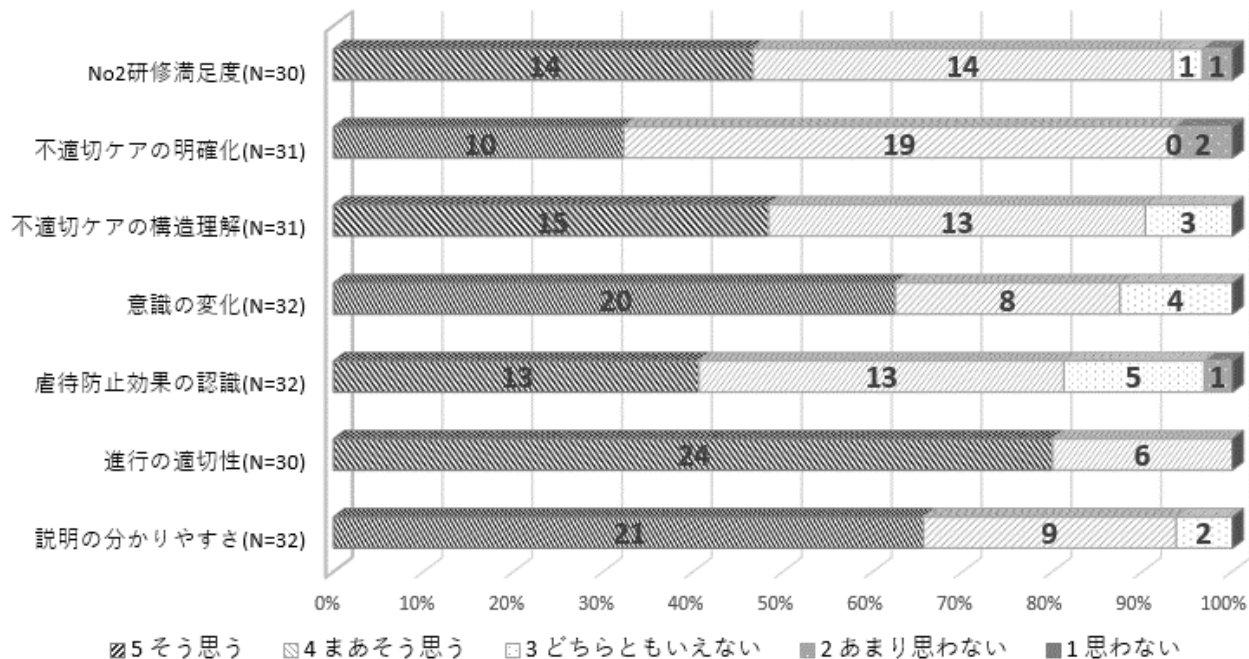


図4 プログラム②「不適切ケアの再認識プログラム」のアンケート結果

IV 考察・結論

本研究を実施したことにより、本プログラムに関する効果検証を行うことができ、以下の1)～3)について把握することができた。

- 1) プログラム①、②ともに多くの参加者が【意識の変化】を実感していたことから、本プログラム①②ともに介護職員の虐待予防にかかわる意識の変化に寄与できるプログラムとなっていること。
- 2) 【虐待予防効果に関する主観的評価】に関しては、「プログラム全体を通しての評価」がプログラム①②個々の評価よりも高かったことから、2つのプログラムをセットで行うことにより虐待予防効果が高まること。また、【虐待予防効果】よりも【満足度】や【意識の変化】に関する評価が高かったことを踏まえ、「意識の変化が虐待予防につながる」ということをより実感できるプログラムにするための工夫、改善（例えば行動計画を作成するなど）を行う必要があること。
- 3) プログラム①の満足度、特に「満足」の回答率がプログラム②に比べて15.5%も高くなっている（プログラム全体の満足度よりも高い）ことから、プログラム②の満足度を高める改善が必要であること。そのためには、プログラム②の【不適切ケアの明確化】【構造化の理解】【プログラム進行における説明の分かりやすさ】を改善する必要があるということ。

上記2)および3)に関する改善策については、3回のプログラム実施後の反省会でも検討され、プログラムの進行、説明、助言に関する方法などに関しては、既に改善した点もある。今後は、本研究結果をふまえてプログラムの内容に関する改善を行った上で効果検証のための研究を行い、さらに虐待予防効果のあるプログラムを地域の高齢者施設に提供したい。

倫理審査	■承認番号(18033) □該当しない				
利益相反	■なし □あり()				
発表状況	種別	□著書	□論文	■学会発表	□紀要 □その他()
	年月日	2019年 9月 19日 (□確定 ■予定) 採択済み			